

○ジクート×イリス

1

人狼のイリスは、幸せの絶頂にいた。

明日、クロガネとの結婚식을控えている。

クロガネは、イリスのいる群れのリーダーだ。

歳はイリスと同じ二十歳。

若い、美しく強い男だ。

イリスとの間には、すでに一歳のユウという子どもがいる。

「イリス、結婚おめでとう」

イリスが草原に佇んでいると、背後から、声かけられる。

イリスが振り返ると、ジクートが小さく笑っていた。

「ありがとう」

イリスは、ジクートが祝福してくれたのが嬉しくてたまらない。ジクートは、イリスの幼なじみの青年だ。ジクートはクロガネと無二の友人でもあり、三人はとても仲が良かった。

ずっとこの幸せが続ければ良い。

ジクートがイリスに花束を差し出す。

イリスは心から笑って、その花束を受け取った。

2

イリスは、気がつくと闇の中にいた。

手足は鎖のようなもので繋がれて、ろくに動かせない。

暗闇の中から、誰かがイリスに手を伸ばす。

それは、イリスの服を破き、足を開かせると、熱いものを突きつけた。

犯される。

イリスは我を忘れて叫んだ。

だが、それはそのままイリスの中に押し入る。

「いやだ、やめろ」

イリスは認めたくない事実直面していた。人狼のイリスは、人の姿をしていても、野生の狼のように五感が優れている。その目は、闇の中で己を犯すものを、はっきりと捉えていた。

どうして。

イリスを犯しているのはジクートだった。

そのまま、ジクートはイリスの中を蹂躪し、熱い汚濁を放った。

### 3

翌日、イリスは更なる絶望を味わった。

夫となるはずだったクロガネが、何者かに殺されたというのだ。

代わりに群れのリーダーになったのは、よりもよってジクートだった。

誰がクロガネを殺したのか。

誰もが粛清と処罰を恐れて決して口にはしない。

だが、イリスには分かっていた。

愛しいクロガネを殺し、自分を犯したのは、兄弟のように仲良く育ったジクートであると。

「どうして、どうして」

イリスは、洞窟に囚われながら、残酷な裏切りに涙するほかなかった。

#### 4

それから、毎夜、ジクートは洞窟にやってきては、イリスを犯した。

イリスは快樂に声をあげてしまうようになった。だが、どうしても、恋人を殺した男を許すことができなかった。

そんなときだった。

イリスが子どもを孕（みごも）ってしまったのは。

イリスのような人狼は、男であつても稀に妊娠できる体を持って生まれてくる。

まさか、クロガネとではなく、愛のないジクートとの子を授かるなんて。

イリスは、運命を受け入れることができなかった。

そのまま、ジクートに妊娠していることを告げることができないまま、時間ばかりが過ぎた。

#### 5

イリスは子どもの頃から、ジクートのことを兄弟のように大切に思っていた。

ジクートは、イリスよりも狩りが得意だったし、頭も良かった。だが、イリスには対等に接してくれたし、決して威張ったりしなかった。

ジクートのことを信頼していた。番になれなくても、ずっと側でお互いを支える関係であれたら。そう願っていた。

そのジクートに裏切られ、妊娠までさせられた。

これから、どう生きていけばいいのか。

イリスは答えの出ない迷宮を惑うほかなかった。

6

洞窟の奥深くにも朝陽が差し込む頃。

イリスは一人で子どもを産んだ。

生まれたばかりの人狼は、狼の姿をしていることが多く、その子も白い毛並みをした狼だった。

イリスには似ておらず、白い毛並みはジクートそのものだった。

イリスは直感した。

ジクートに似た我が子を愛せないだろうと。

その予感、半分は当たり、半分は外れることになる。

7

「この子に名前をつけてくれ」

イリスが産んだ子を抱いて、ジクートがじっと見つめてくる。

イリスは困ってしまった。

ジクートのまっすぐな眼差しと、いきなりの懇願に。

ジクートは一体何を考えているのだろう。

イリスには、兄弟同然だったはずのジクートの考えが分からない。

「シロと」

ただ、自然と頭の中に思い浮かんだ名前を口にする。

「シロだな」

その名前を聞いて、ジクートは破顔した。

ありきたりな名前だった。

愛情など感じられない名前だ。

だが、ジクートは歯を見せて笑った。

イリスは、思わず、その表情に見入ってしまった。  
そして、そんな自分を恥じた。

## 8

イリスは、シロが一歳になる前に、病を得た。  
人狼は元々寿命が短い、イリスは病弱な体質だったらしい。  
ジクトは医者と呼ばひ、必死で薬を探したが、イリスの病は治らなかった。

イリスは、死期を悟った。

側を離れないジクトを、つくづく哀れな男だと思った。

他にもっと良い番に巡り合えたらうに、イリスのような弱い人狼に執着して、人生を棒に振った。

だが、同時に、ジクトに愛されて幸せだったと思ってしまう自分がいた。

クロガネのために、決して、その想いは口にはしない。

ただ、復讐の意味も込めてその言葉を放つ。

「ジクト。ユウを守って」

ユウ。

それは、クロガネとの間に授かった子で、シロの異父兄でもある。

ジクトの顔が引きつるが、それは一瞬だった。こんなときでも、ジクトは冷静で、優しい。

「分かった。必ず守る」

「良かった」

イリスは微笑み、目を閉じる。

涙を懸命に抑えて、愛しい男の顔を目に焼き付けながら。

最後に見たものが、ジクトであって良かった。

イリスは心からそう思った。

シロ×ユウ編へつづく。